

令和6年度第2回屋久島世界遺産地域科学委員会 ヤクシカ・ワーキンググループ
及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議について(報告)

1. 開催日時

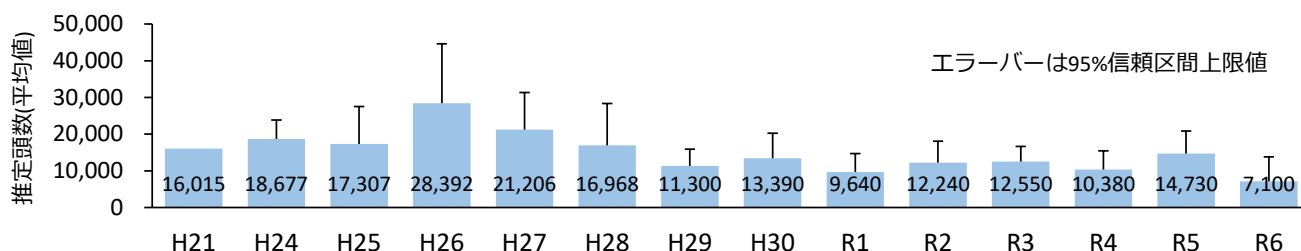
令和7年2月13日(木) 14:00～17:00 鹿児島市(宝山ホール)

2. 議事概要

(1) ヤクシカの生息状況等について

■報告の要点

- ・R6の糞粒調査による推定生息密度は、前年度と比較して増加地点が10地点、減少が26地点で全体では減少。西部地域を除き、全域的に密度は低く抑えられているが、東部に新たに高密度部分が出現。(鹿児島県)
- ・糞塊密度は昨年度より増加した箇所が多く、特に西部から南部にかけて継続して高密度。(環境省)



- ・花之江河のヤクシカ撮影数は昨年度と比較して半分以下で小花之江河でも6割程度に減少。糞塊数については花之江河では糞塊数・確認箇所数ともに減少し、小花之江河では確認箇所が2箇所増加。(林野庁)

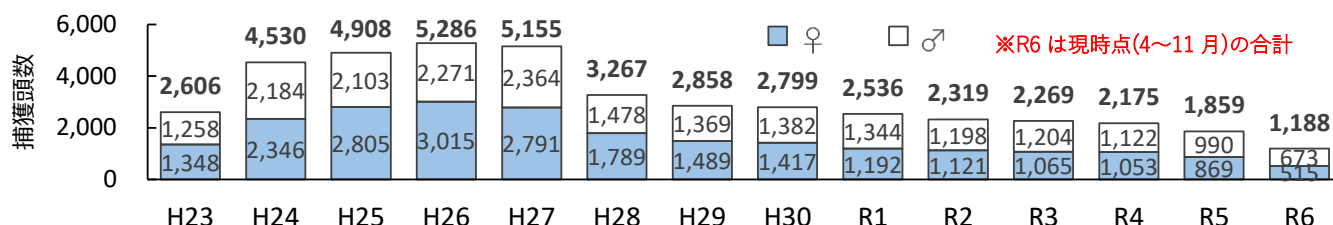
■主な意見

- ・地元での実感として、里地に山からサルやシカが下りている傾向がある。タヌキも林道沿いに下りて来ている。
- ・西部地域について今年の秋は堅果類の実りが悪い。サルはそれで下りてきていると考えられる。
- ・国有林の中を見ている実感では、昨年と比べシカを見る回数が少し減った印象。
- ・糞粒法と糞塊法は年によりばらつきがあり、1年毎に変化を捉えていくのは難しい。
- ・推定個体数と捕獲数との関係を見ると自然増加率が変わっている可能性がある。少なくとも増え続けている感じではない。糞粒法、糞塊法、捕獲数の結果を全て使ってベイズ推定をやっていく方法もある。
- ・河川界の10区分で見えていくのは細かすぎる。もう少し荒い区分の方がわかりやすい。
- ・西部と永田など、糞粒法と糞塊法の結果が異なっている部分を見るには今の河川界区分で続けていくのもよい。区分をまとめるのであれば足せばよいのではないかな。
- ・各河川界で信頼区間をとっており、上限、下限、平均のどこにあるのかわからないため、単純に足すのは難しい。
- ・明らかに誘引により捕獲数が多いところは、アスタリスクをつけて理由を記載するとよい。
- ・河川界区分は生息状況の評価にはよいが、捕獲効果の検証については土地利用や傾斜等による分類の方がよい。

(2) 捕獲等の被害防止対策について

■報告の要点

- ・鳥獣被害防止の担い手支援として、新規狩猟免許取得の助成を4名に実施。(屋久島町)
- ・R6年度11月時点のヤクシカ捕獲頭数は1,188頭で前年度同期の105%。(林野庁)



- ・R6年度指定管理鳥獣捕獲等事業は船行、鍋山林道で目標頭数70頭として実施。1月末時点で21頭捕獲(鹿児島県)
- ・R6年度のSS体制による計画捕獲はカンカケ林道で待ち伏せ型誘引狙撃を実施し、オス1頭捕獲。餌場から50m以上離れた場所(テント設置)からの待ち伏せ捕獲が可能であることを確認。(環境省)

■主な意見

- ・被害情報としてダニ被害発生とあるが、差し支えなければSFTSの発生件数等も載せられないか。
- ・メスの効果的な捕獲として罠の近くに食塩水を置く方法がある。4月～7月の妊娠期間にやってみるのはどうか。
- ・既に水を使った場合との比較検証をしており、今のところ食塩水と水に誘引差はない。

- ・経験的に、海に近い場所では、潮風で植物に塩分が元々ついているためか塩類の誘引が利きにくい。
- ・ヤクシカは骨や角からカルシウムも摂取しているので、カルシウムと塩を混ぜたらどうか。
- ・上屋久猟友会での捕獲数の減少は優秀なハンターが減った影響。捕獲数には1人のハンターの影響もかなりある。

(3) 森林生態系の管理目標及びその他植生モニタリング等について

■報告の要点

- ・シダ植物の林床被度は、各調査地とも未回復種が存在するが、出現種数はカンカケ 600m で増加。(林野庁)
- ・西部地域の生育植物種数については、標高 200m、800m、1200m で目標を達成し、同地域のヤクシカ嗜好性植物種数についても標高 800m~1200m で目標を達成しているが、消失したままの種も存在。(林野庁)
- ・カンカケ地域の植生保護柵については、台風による倒木やシカにより破損箇所が多く発生。(林野庁)
- ・絶滅危惧種調査は島内 10 地点で実施。種数が 3 地点、個体数が 6 地点で減少し、その他は維持増加。(環境省)
- ・環境省の植生保護柵について、被度は全て柵内の方が大きい。種数・株数は大型シダ植物の優占による影響等もあり、柵外の方が多くなった箇所も見られたが、種数に関しては、経年的には増加傾向。(環境省)

■主な意見

- ・病害虫の発生について、気候変動による昆虫の増加が近年指摘されており、今後気候との関係を見ていくべき。
- ・植物は全体として回復傾向にあるが、柵外はよくない。また種数は、小さい植物が沢山生えると増えるので、よい指標にならない場合もある。
- ・タネガシマムヨウランは出現時期が限られており、調査時期により見つからなかった可能性がある。
- ・大型台風の後には、シカ柵のメンテナンスが重要。

(4) 特定エリアの対策(西部地域)について

■報告の要点

- ・R6 年度は瀬切の罾を 2 基(箇所)増やし、計 4 基(箇所)で計画捕獲を 9 月から実施。新設の 2 基は、既設の潜り込式ゲートと同等の仕組みを持ち、かつ簡易設置できる移動式囲い罾を使用。(環境省)
- ・1 月時点で計 6 週間の誘引を行い、既設罾で計 12 頭(オス 4、メス 8)、新設罾で計 9 頭(オス 7、メス 2)、合計 21 頭を捕獲(昨年度は 2 基の罾を用い、6 週間の誘引で 10 頭の捕獲)。(環境省)
- ・植生保護柵 6 基内外の植物種数は、柵内では全て、柵外も過半数で増加。林床被度は柵内 4 箇所、柵外 2 箇所で増加。モニタリングは必要だが、捕獲効果が部分的に現れている可能性がある。(環境省)
- ・保護柵周辺では、植物種数は増加箇所も多かったが、林床被度は低いまま推移している箇所も多い。(環境省)
- ・R6 年度のヤクシカ推定生息密度は、捕獲開始時(R2 年度)と比べて減少し、捕獲効果が現れている。但し、瀬切平・瀬切道下は R4 年度から増加傾向に転じ、誘引作業の影響も考えられる。(環境省)

■主な意見

- ・通常食物の乏しい冬にシカの歯に年輪が出るが、屋久島ではそれが不明瞭。冬も栄養状態は悪くなっていない。
- ・西部の捕獲していない地域と比較できないか。捕獲しなくても年変動するので、捕獲地域との違いを見たい。
- ・捕獲数も重要だが、どの程度減少したかを把握するため、センサーカメラ結果や罾の CPUE も出してほしい。

(5) 屋久島世界遺産地域モニタリング計画の改訂について

■報告の要点

- ・修正した改訂モニタリング計画やモニタリング項目、今後の実施計画等を提示し、主にヤクシカ関係部分について報告。(環境省)

■主な意見

- ・ヤクシカの発育段階を知るための情報を集めており、下顎骨のモニタリングは事業ベースでもできる内容である。

(6) その他

■主な意見

- ・タヌキは屋久島では外来種でダニも媒介し、しっかり調べる必要がある。糞粒・糞塊調査においてタヌキのため糞をよく見つける。調査者にため糞のデータをとってもらえば、タヌキの生息状況が全島の的になる。
- ・野生動物の被害の一つとして感染症も重要。SFTS はダニからだけでなく、宿主動物からの感染もある。
- ・タヌキの糞の DNA 分析をすればかなり食性がわかる。
- ・タヌキは、遺産地域の生態系影響以外に農業被害も年々増えている。
- ・タヌキは町と猟友会で協力して捕獲を努力してきた。屋久島の外来種は絶滅させることで本来の島の生態系をとりもどせる。捕獲個体を活用した病原菌等の調査もぜひやってほしい。
- ・屋久島でのシャープシューティングは安全管理が徹底され、捕獲技術者もそろってきている。今後、高標高地域でもやっていけるのではないかな。